

農作物技術情報 第9号 畑作物

発行日 令和7年11月27日

発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部

編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 小麦 雪腐病の発生量は「並」と予報されていますが、雪腐病の常発地帯では、雪腐病の種類に応じた防除を必ず実施しましょう。越冬後の融雪対策のため、排水路の点検、整備を行いましょう。

小麦

1 生育状況等

は種後は平年より気温が高く経過し初期生育が良好だったため、10月後半以降やや低温で経過しましたが、生育量は概ね確保されています。

越冬後には追肥や踏圧を適期に実施できるよう、排水路の点検・整備による排水対策を万全にし、赤かび病に強い健全な麦の栽培に努めてください。

2 雪腐病の防除

農作物病虫害発生予察情報第7号（令和7年10月31日発行）によると、雪腐病の発生量は「並」と予報されていますが、例年発生するほ場や、県北部や高標高地帯などの根雪期間が長い地域、耐寒雪性が「やや弱」の「銀河のちから」及び「ナンプキラリ」は被害が発生しやすいので、雪腐病防除を行ってください。雪腐病の防除時期は根雪前が最も有効とされていますが、根雪になる時期は年によって変動が大きいので、散布時期を逃さないよう注意が必要です。薬剤等の情報は農作物技術情報第8号畑作物（令和7年10月30日発行）に掲載されていますのでご覧ください。



写真1 雪腐褐色小粒菌核病の被害ほ場

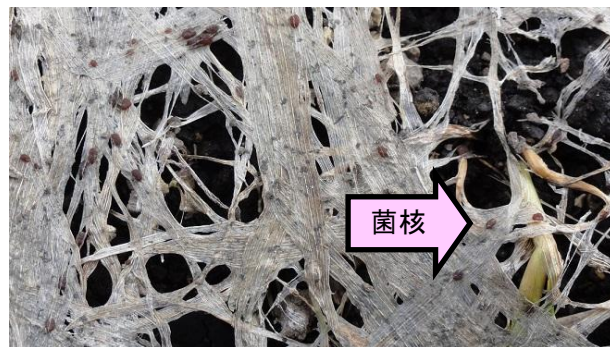


写真2 雪腐褐色小粒菌核病の拡大写真

3 排水路の点検

越冬後の融雪水による湿害等を防ぐため、根雪前に明きょや排水路の点検・整備を行います。土塊等で塞がっている場合は、スムーズに排水が行われるよう土塊を撤去してください。

また、越冬後のほ場排水を促すことで、融雪期の追肥作業等も適期に実施できます。

※ 暗きょ排水は、水田を乾かすための排水施設ですが、排水パイプの周囲に疎水材として埋められているモミガラは、乾湿を繰り返すことで腐食が進み通水性が悪化しやすくなります。このため、小麦などの冬作物が作付けされていないほ場では、モミガラを長持ちさせるため冬期間は暗きょの^{すいこう}水閘を閉じておきます。

また、融雪水がたまったら水閘^{すいこう}を開き、一気に水を流すことで堆積した水あかや土砂を押し出すことができますので、暗きょ排水管が詰まらないよう定期的に清掃してください。なお、暗きょ排水口が排水路の水面より下にある場合や、排水路にたまった泥に埋まる状態では、水が抜け難くなりますので、排水路の清掃も適切に行ってください。

4 積雪期間中の注意

小麦栽培では、積雪期間中の作業は特にありません。積雪のあるほ場は滑りやすい上に、水路等の確認が難しく危険ですので、必要時以外は立ち入らないようにしてください。

なお、雪解けが近づいたら、雪解け後の作業スケジュールを早いうちから計画します。

農作物技術情報の本年度定期発行は今号で終了となりますが、気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
--

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第9号 野菜

発行日 令和7年11月27日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 寒じめほうれんそう ハウス内の温度管理を徹底し、収量・品質を確保しましょう。
- ◆ 促成アスパラガス 適切な温度・かん水管理を徹底し、収量を確保しましょう。
- ◆ 冬春どり葉菜類 被覆資材の利用や換気等により、収量を確保しましょう。
(無加温ハウス)

1 技術対策

(1) 寒じめほうれんそう

- ・ ハウスの開閉による適切な温度管理を行い、収穫できる葉長まで生育させます。その後は、ハウスの入口やサイドビニールを開け、1週間程度5℃以下の低温に連続して遭遇させる「寒じめ」を行い、糖度の上昇を促します。
- ・ 寒じめ処理後は、平たく開張した、葉長15～28cmのものを収穫します（写真1）。調製は下葉を取り除き、根を3mm以下に切りそろえ、土等の汚れはしっかりふき取ってから、袋詰めします。



写真1 収穫直前の寒じめほうれんそう
(ハウス内の温度管理が重要)

(2) 促成アスパラガス

- ・ 伏せ込み後1週間～10日程度は無加温とし、徐々に地温を16～18℃まで上げます。
- ・ 萌芽開始後は、地温15～16℃、トンネル内気温を日中25℃以下、夜間10℃以上を目標に管理します。また、日中はできるだけ太陽光に当てて着色を促します（写真2）。
- ・ かん水は伏せ込み床の乾き具合に応じて、晴天日の午前中に気温が上昇してから行います。
- ・ 長さ30cm程度に達した若茎から順次収穫します。曲がりや開き、細茎等は、早めに切り取り、根株の消耗を防ぎます。
- ・ 収穫量は伏せ込み後20～30日程度でピークを迎え、その後は徐々に減少していきます。収穫期間は1.5～1.8kgの標準的な根株で60～70日程度が目安となります。



写真2 萌芽開始後の促成アスパラガス
(太陽光に当てて着色を促す)

(3) 冬春どり葉菜類（こまつな、さんとうさい、チンゲンサイ等）（無加温ハウス）

- ・ カーテン、トンネル、不織布等の被覆資材を利用して保温に努め、生育促進と凍害防止を図ります。ただし、被覆資材は光透過率の高いものを使用します。
- ・ 晴天日の日中はできるだけ換気を行って湿度を下げ、べと病や灰色かび病等の発生を防ぎます。
- ・ 生育中のかん水は、は種前に十分行っていれば必要ありませんが、明らかに水分不足が見られる場合は、晴天日の午前中に実施します。
- ・ 近年、冬春どり葉菜類で農薬残留基準を超過する事例が相次いでいます。農薬登録情報・使用方法の確認、タンク・ノズル・ホースの丁寧な洗浄等、基本事項を徹底してください。

農作物技術情報の本年度定期発行は今号で終了となりますが、気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第9号 果樹

発行日 令和7年11月27日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

◆ りんごの貯蔵販売時には、果実の軟化・果肉障害に注意しましょう。

◆ 獣害、凍寒害、翌春の凍霜害対策に努めましょう。

1 貯蔵りんごの管理

今年の「ふじ」の糖度は、平年並から高めです。また、蜜入りは、平年より少ないものの、夏秋期が高温だった昨年及び一昨年よりは多い状態で収穫期を迎えました。なお、硬度は平年並から低めで、貯蔵中の軟化が懸念されます。貯蔵中は、随時、果肉の状態を確認し、硬度の低下や果肉の褐変など障害が発生していない果実を販売してください。

なお、「シナノゴールド」は、昨年同様、園地によっては高温対策として落果防止剤を使用しているため、例年より軟化が懸念されます。また、通常年であっても、酸抜けを待つて遅めに収穫した果実では、4～5カ月貯蔵すると果肉が褐変することがあります。今年は特に果肉の状況等を確認してから、販売してください。

2 獣害対策

(1) 野ネズミ対策

苗木、若木（特にJ M 7 台木利用樹）は野ネズミの食害を受けやすいため、根雪前に対策を実施します。

園地内に放置された果実は、野ネズミの餌となるため取り除き、各種忌避剤、殺そ剤による対策も合わせて実施します。

(2) 電気柵の点検

近年、ニホンジカによる花芽、樹皮などの食害（写真1）を軽減するために、各地でフェンシングワイヤーを利用した恒久電気柵の導入が進んでいます（写真2）。

導入した園地では、根雪前に草や園地周辺の樹木が電線に接触していないか、支柱や碍子に破損はないか、十分な電圧は確保されているか等を点検し、冬季の被害に備えます。

なお、詳細は、令和7年5月29日及び6月26日発行の農作物技術情報特別号野生獣対策を確認してください。



写真1 ニホンジカによる芽の食害

(3) 廃棄果実の処分

選果等で発生した廃棄果実を園地内外にそのまま放置すると、ハクビシンや野ネズミの増殖、ツキノワグマによる人的被害などを助長することがあります。

廃棄果実は、地中深く埋めるか破碎するなどの処理を実施し、獣害が発生しにくい園地環境をつくります。特に、本年はツキノワグマの出没が多いことから、令和7年9月25日及び10月30日発行の農作物技術情報特別号ツキノワグマ対策も併せて確認してください。



写真2 恒久電気柵の設置事例

3 樹体の凍寒害防止

りんごなどの落葉果樹は、落葉後一定期間を低温で経過して休眠に入り、耐凍性を確保します。しかし、近年は冬季の気温が高めに経過するため樹体の休眠は浅く、耐凍性が徐々に低下し、その後の低温遭遇で凍寒害が発生する場合があります。

凍寒害は、若木（定植年から結実初期3～4年生）で発生しやすく、結実量が多く衰弱した樹や水はけの悪いほ場、肥料が遅効きして新梢の止まりの悪い樹は、樹齢が進んでも被害を受けることがあります。

発生が心配される園地では、若木を中心に地際部から高さ50cm程度まで、炭酸カルシウム剤（商品名：ホワイトンパウダー、写真3）を塗布するか、わらを巻くなどして表面温度の上昇を抑制し、適正な休眠誘導を図って被害の軽減を図ります。



写真3 ホワイトンパウダーを塗布した状態

4 土壌診断のすすめ

近年、高温乾燥やゲリラ豪雨などの気象変動により、土壌の乾燥・湿潤の変動が大きく、樹体の衰弱や果実の裂果、生理障害の発生が懸念されます。

特に、土壌が乾燥している場合、土壌に十分な養分があっても吸収できず、樹勢が弱ることがあります。この場合、必要以上に施肥を行うと逆に樹勢が強くなったり、土壌養分バランスが崩れて養分欠乏症が発生することがあります。ここ数年、土壌診断を実施していない園地では、土壌診断を行って適正に施肥してください。

5 耕種的な病虫害防除

休眠期の耕種的な病虫害防除は、園地内の伝染源を減らすため重要な作業です。

特に、りんご腐らん病の患部は、ていねいに削り取って処分し、切り口には保護を目的とした専用殺菌剤を塗布します。また、りんご炭疽病やぶどう晚腐病の病原菌は、古い組織で越冬し、翌年の伝染源となるので、樹上に残った被害果や果梗、巻きひげ等の除去に努めます。

6 翌春の凍霜害対策

近年、春期の気温が平年より高めで経過し、一時的な低温に遭遇した際に凍霜害が発生しています。特に、3月の平均気温が平年を上回る場合は、その後の主要果樹類の生態が前進化しやすく、凍霜害回避に向けた早めの準備が必要です。

(1) 燃焼法

燃焼法は一定コスト（30,000円/10a程度）がかかるため、被害が多かったほ場では低温になりやすい場所など、地形も考慮して設置するなどの配慮が必要です。

(2) 防霜ファンや散水氷結法に係る施設の点検整備

生育が早まった場合でも稼働できるよう点検整備を早めに行います。

畑地かんがいを利用して散水氷結法を行っている地域は、4月から利用できるよう関係機関を含めた検討を行います。

(3) 果樹共済、収入保険などへの加入

気象災害は技術的な対策だけでは防ぐことは難しいため、減収を補填する果樹共済や価格低下などの収入の減少を補填する収入保険への加入を検討します。

農作物技術情報の本年度定期発行は今号で終了となりますが、気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第9号 畜産

発行日 令和7年11月27日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 牧草 来年度の収量・品質アップにつなげるため、土壌分析を行って、土壌への石灰質資材の施用を検討しましょう。
- ◆ 子牛 黒毛和種、ホルスタイン種とも、4週齢から哺乳量を増やし栄養を充足させましょう。ぬるま湯を給与し、固形飼料の採食も促しましょう。

1 土壌分析を行って、土壌改良をする

本県の施肥基準は、表1の目標値を満たした土壌が前提となっています。中でも pH は、次の3つの理由から最も大事な項目ですので、最優先で土壌改良します。

表1 牧草畑・飼料畑の維持すべき目標(化学性)

項目	飼料畑	牧草地	摘要
pH (H ₂ O)	6.0～6.5	6.0～6.5	
CEC	20me/100g 以上	20me/100g 以上	腐植の増加と粘土の投入
交換性石灰 (CaO)	250mg/100g 以上	250mg/100g 以上	CaO/28=me/100g
交換性苦土 (MgO)	40mg/100g 以上	40mg/100g 以上	MgO/20=me/100g
交換性加里 (K ₂ O)	20mg/100g 以上	20mg/100g 以上	K ₂ O/47=me/100g
塩基飽和度	60～80%	60～80%	
石灰苦土比 (CaO/MgO)	6 以下(当量比)	6 以下(当量比)	CaO/MgO × 0.719
苦土加里比 (MgO/K ₂ O)	2 以上(当量比)	2 以上(当量比)	MgO/K ₂ O × 2.336
可給態リン酸 (Truog-P ₂ O ₅)	16～25mg/100g	5～10mg/100g	蓄積リン酸の有効利用

「牧草・飼料作物生産利用指針」令和2年5月 岩手県

(1) 肥料成分の吸収を左右する土壌 pH

牧草・飼料作物の最適 pH は、6.0～6.5 です。土壌 pH が低くなると、肥料の溶解度が低下するため、作物の生育に必要な窒素、リン酸や微量元素が吸収し難くなります(図1)。

また、pH が低いと根張りが悪くなるため、植物体が肥料を吸収できない状態になります。

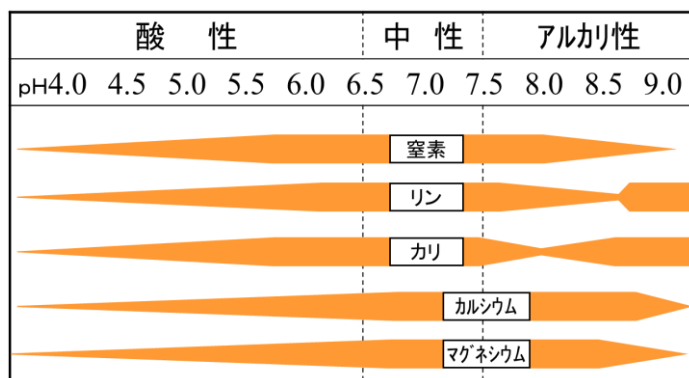


図1 土壌 pH と肥料要素の溶解・利用度(Truog, 1949)

※幅が太いほど作物の吸収効率が大きい

(2) 酸性雨や化学肥料由来のマイナスイオンにより、カルシウムが流亡する

pHを改良する（高くする）石灰質資材は、カルシウムが主成分です。

化学肥料中のカルシウムやカリウムなどプラスイオンは植物体に吸収されますが、土壤中にマイナスイオンが残ります。そのマイナスイオンは、カルシウムやマグネシウムと容易に結合して根圏の外に流亡します（図2）。

また、酸性雨に含まれる炭酸がカルシウム、マグネシウムと結合した時も流亡します。

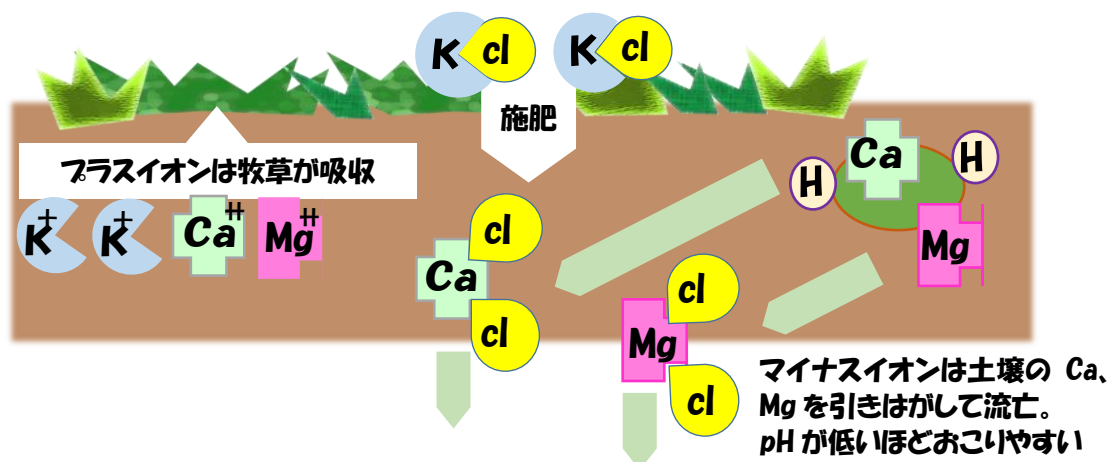


図2 草地への施肥とプラスイオンの流亡(模式図)

(3) 植物体に必要なカルシウム

カルシウムは植物体の中でも重要な役割を果たしています。生体構造の維持や情報伝達、温度や水分などの環境ストレスへの対応にも役立っているほか、カルシウム欠乏により、地上部生長点や根の先端の伸長が停止し、先端部の壊死を引き起こしたり、病原体が侵入したりします。

2 哺乳期の子牛の栄養はミルクで充足させる

(1) 哺乳期の栄養源はミルク

黒毛和種、ホルスタイン種とも、哺乳期は主な栄養源をミルクに頼っている時期なので、養分要求量に合わせて4週齢まではミルクの量を増やしていく必要があります。不足すると栄養不足のため風邪をひきやすい、下痢になるなど、発育のチャンスを逃しかねません。

自然哺乳の場合は、授乳量が足りているかよく観察し、不足する場合は人工哺乳の併用を検討します。

		固形飼料は離乳に向けて増給							
子牛用配合飼料							200g	600g	1kg
スターター		50g	100g	200g	600g	600g	600g	600g	600g
		ミルクでしっかり 栄養を摂る時期							
ミルク(ℓ/日)		4	6	6	8	8	8	6	3
週齢		1	2	3	4	5	6	7	8
月齢		1				2			

図3 子牛(黒毛和種・ホルスタイン種)の1日当たり飼料給与例

人工哺乳の場合、ミルクを飲ませるスピードにも注意が必要です。

早く飲んでほしいからと、乳首（ニップル）の穴を広げたり、バケツに顔を入れてがぶ飲みさせたりするなど、一度に大量にミルクを飲みこむとミルクはルーメンに流入し、ルーメンアシド

ーシスの一因になります。乳を第4胃で消化吸収させるためには、一口に飲み込むミルクの量を少なくし、10分位かけて飲ませる「ちびちび哺乳」に取り組みます。



写真1 バケツからのがぶ飲み

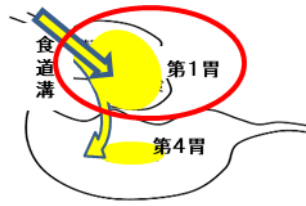


図4 がぶ飲みしたミルクのルーメンへの流入



写真2 ルーメンに流入したミルク(灰色:不良発酵)と不消化の牧草



写真3 ちびちび哺乳(唾液がよく出て泡のようになっている)

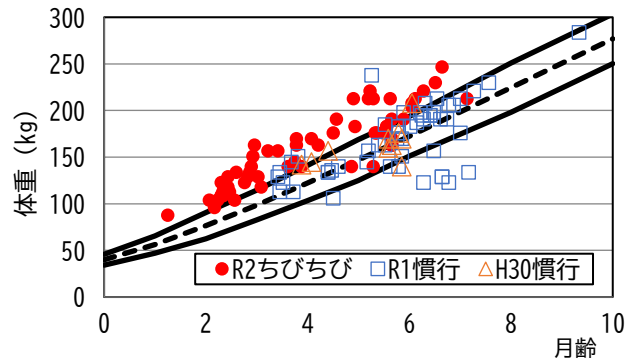


図5 哺乳方法と発育
(H30～R2 年二戸普及センター調べ)

(2) 固形飼料(スターター)で第1胃(ルーメン)を育てる

スターターに含まれるでんぷん質が、ルーメンの絨毛を育て微生物や原虫を増やします。ルーメンの絨毛が十分に発達してこそ、牧草を消化吸収できるようになります。哺乳期は、牧草よりスターターの給与を優先してルーメンの発達を促します。

スターターを食べるためには、4倍の水が必要といわれます。寒冷期はぬるま湯を給与して、スターターを十分に採食させます。



写真4 子牛用の飼槽
(スターター1kg ならぬるま湯4リットル)

(3) 哺乳期の注意点

哺乳に満足すると子牛は「ミルクを飲んだらゆっくり寝る」ようになります。栄養が不足して空腹状態になっている時の行動には、人の手や服に吸い付く、子牛同士でなめ合う、壁やマセン棒をなめる、敷料を食べるなどがあり、食滞や下痢、感染症のリスクとなります。哺乳後の子牛の行動を観察

して、子牛が満足しているか判断します。

経口補液を飲ませる場合は、ミルクとは混ぜずに別々に給与します。経口補液や水はルーメンに入り、ミルクは第4胃で消化吸収されるためです。発熱や下痢などにより獣医師の指示のもと断乳した時は、ハロゲンヒーターや湯たんぽを活用して、子牛の保温に努めます。

1日当たり1kgのスターターや子牛用配合飼料を連続して食べられるようになったら、離乳の準備に入ります。成牛と同様に、牧草などの繊維質を採食させた10～15分後に配合飼料を給与して、ルーメン内微生物の働きを安定させます。うまく消化できているかは、糞の状態で判断します。

農作物技術情報の本年度定期発行は今号で終了となりますが、気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
--

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第9号 大雪対策

発行日 令和7年11月27日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

今年の冬の気温は平年並みか高いと発表されています（気象庁3か月予報、11月25日発表）が、一時的に強い寒気が入り大雪になる可能性があります。

園芸施設や水稲育苗ハウスなどの大雪への備えは降雪前からの準備が重要ですので、今から万全の対策を講じて被害発生を防止しましょう。

農業施設

降雪前から対策を実施しましょう！

1 雪の被害の特徴

(1) 積雪荷重の強度超過

平年並みの降雪に対しては、予め柱の補強や暖房機の設定温度を上げるなどの対策で対処できますが、記録的な積雪の場合、ハウスの耐雪強度を大幅に超過するため、構造的に必要なと思われる筋交いがない、水平ばりが配置されていない等のハウスは倒壊する危険が高まります。



単棟パイプハウスのM字型陥没



水平ばりの折れ



連棟パイプハウスの倒壊

(2) 耐用年数

耐用年数を超過したハウスは、基礎や柱が腐食している場合が多く倒壊を助長します。

アーチパイプの地際部が腐食している場合は、同じ太さの新しいパイプを補強用として差し込み、接続金具（バインドクロス）により上下2か所をつないで補修します。



地際部の腐食による折れ

2 降雪前の対策

- (1) ビニールハウス等被覆資材の破損部を補修して風の吹込みによる破損を避けます。
- (2) 筋交い直管は、各アーチパイプを針金等で固定し、下端部は必ず地面に 30 cm 以上埋め込みます（図 1）。既存の筋交いも台風等で緩んでいることがあるので、きっちりと固定されているか確認します。
- (3) 雪でハウス屋根中央部が陥没しないように、中柱（補強用の支柱）を 3～4 m 間隔で設置します。中柱の上部は屋根面の直管パイプと T 字金具等で固定し、下部はブロックや厚板等で沈み込みを防止します（図 2）。
- (4) 暖房装置が設置されている場合、燃料の残量や暖房装置の動作を確認します。また、停電になった場合に備え、暖房機を稼働できるように発電機を確保するか、石油ストーブ等を準備します。
- (5) 降雪後に除雪機を使用する場合は、ハウス周囲の障害物を取り除いておきます。

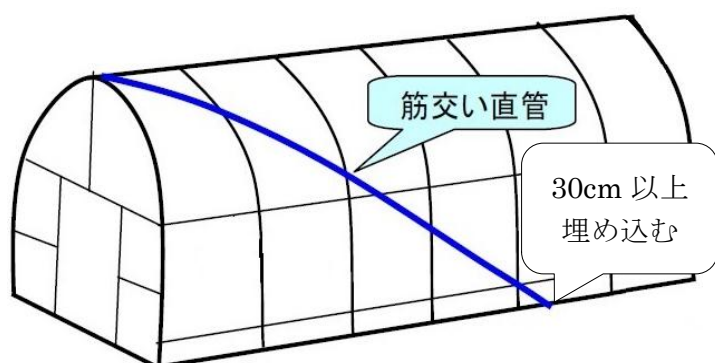


図 1 筋交い直管による補強

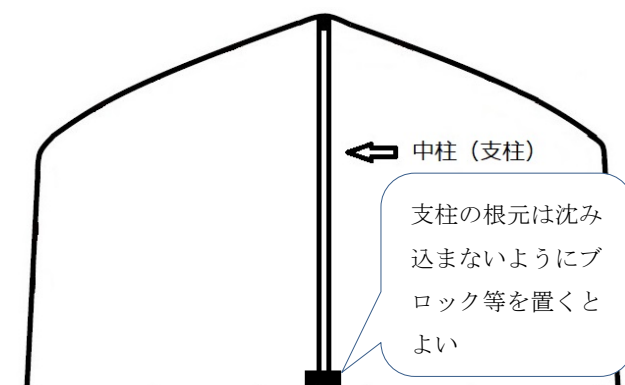


図 2 中柱による補強

3 降雪時の対策

- (1) 降雪前から施設内の温度を高めて積雪の自然落下を促進

ア 暖房機が設置されている場合は運転して室内温度を上げます。

イ 暖房機がない場合、内部を密閉して気密性を高めることで、地熱により室内温を上昇させて屋根雪を滑り落ちやすくします。緊急に暖房（石油ストーブ等）を入れて融雪を促す場合は、くれぐれも火災や一酸化炭素中毒に注意してください。

ウ ハウス内でカーテンを使用している場合は、カーテンを開いて、屋根面からの放熱量を増やして融雪を促します。

(2) 積もっているハウス側面の雪を遅れることなく除雪

ハウスの雪下ろしを行う場合、あらかじめハウスの周辺、特に両サイドの雪を取り除いてから上部にたまった雪を下ろし、再度ハウス側面の雪を除雪します。

なお、散水による屋根の除雪・融雪については、滑落目的で降り始めから行い、積雪後は実施してはいけません。

(3) 除雪作業が追いつかない場合の緊急対策（非常手段）

ア 積雪による重みや、側面からの圧力によるハウス骨材の損傷を防止するため、ビニールを切断・除去し、雪をハウスの内部にも入れます。この時、事故防止のため、作業は複数人で行います。

イ ハウスの倒壊が予測される場合には、ハウスへの立ち入りを避け事故を防ぎます。

4 降雪後の対策

(1) 耐雪強度を超えた積雪があった場合は、倒壊の恐れがありますので、ハウスに近付かないでください。また、ハウスの片側だけ太陽光があたったり、風によって積雪が偏ったりすると、ハウスのバランスが崩れ、倒壊する危険性があるので十分に注意します。

(2) 除雪を行う場合は、ヘルメット等をかぶり、複数人で作業を行うなど安全確保に努めます。

(3) 施設倒壊の恐れがなくなったら、施設各部の損傷や被覆資材の緩み等を点検します。また、屋根・軒下・ハウスの間に積雪がある場合は、次の降雪に備えて直ちに除雪します。

5 大雪になった時の注意

ハウスの軒下に積もった雪は、屋根に積もった雪の滑落の妨げになるとともに、ハウスの側壁に圧力を加えます。また、降雪前にハウスビニールを剥いだ場合でも、施設全体もしくはハウスの軒高を超える積雪になると、大きな被害を受ける可能性があります。骨組が完全に雪に埋没しないうちに、できるだけ除雪を行います。湿った雪は骨組に付着するので注意が必要です。

6 大雪被害発生に伴う復旧作業

(1) ハウスの倒壊が始まった場合には、ハウス内への立ち入りを避け事故を防ぎます。

(2) 倒壊した施設は、一般的に修復が困難であり、施設内の作物は放棄せざるを得ない場合が多いことから、十分に除雪して融雪を待ってから無理のない復旧作業に努めます。

7 関連情報

農林水産省では、降雪前の11月を「災害に強い施設園芸づくり月間」と定め、チェックリストや農業版BCP（事業継続計画）の活用、園芸施設共済、収入保険への加入などにより、災害に負けない施設園芸づくりを推進しています。関連する各種被害防止技術等の情報を岩手県ホームページ(<https://www.pref.iwate.jp/sangyoukoyou/nougyou/seisan/1022400/index.html>)に掲載していますので、これらの情報を参考にして対策に努めてください。

1 事前対策

施設野菜については、育苗・栽培用ハウスが倒壊しないよう、「農業施設」の項を参考にして、事前にハウスの補強や降雪時の除雪を行うとともに、ハウスの倒壊による育苗開始の遅れや、栽培できないことも想定し、事後対策を十分検討しておきます。

2 事後対策

施設野菜で大雪によりハウスが倒壊した場合は、育苗や栽培が継続できるよう、いくつかの対応を検討します。被害の状況によっては、露地栽培への変更も検討します。

(1) 倒壊を免れたハウスを最大限活用する場合

ハウスの倒壊は免れたものの、修理・修繕に時間を要し、定植時期が遅れることが懸念される場合には、苗の順化の延長や大きいポットへの仮植を行い、定植時期を調整します。

(2) ハウスを再建する場合

ア 品目、作型の検討

再建されたハウスを活用して栽培を行う場合、復旧の遅れから、栽培期間が限定されることも想定されるので、品目や作型の変更を検討します。なお、再建時期が5月の場合はトマトやきゅうり、6～7月の場合はきゅうりの栽培が可能です。8月以降は果菜類の栽培は難しく、葉菜類のみが栽培可能です。

イ 定植苗の管理

再建が遅れた場合、6月以降（高温期）の育苗が想定されることから、苗の軟弱徒長が懸念されます。そのため、昼間は24～25℃を目安に換気を行うとともに、夜間は出来るだけ温度を下げ、苗の充実を図ります。

(3) 露地栽培を行う場合

出荷量の確保を図るため、露地栽培の導入も検討します。この場合、必要な苗、誘引資材（パイプ支柱、イボ竹等）の確保を計画的に進めます。特に、誘引資材については地域内に活用できる資材があるかを確認し、低コストな調達方法を検討します。

(4) 遊休ハウスを活用する場合

地域内に栽培を休止した遊休ハウスがある場合は、その活用を検討します。その場合、土壌診断を実施し、必要に応じて土壌改良を行います。

(5) 水稻育苗ハウスを活用する場合

- ・ 置き床育苗ハウスを活用する場合、土耕栽培では水稻育苗時に使用した農薬が残留農薬として検出されるリスクがあるので、必ず、隔離栽培（夢果菜恵、ういずOne等）を行います。
- ・ プール育苗ハウスを活用する場合は、プールの用水がハウス外にしっかりと排水される等の残留農薬のリスクがない場合に限り、土耕栽培を行うことが可能です。この場合、土壌診断を実施し、必要に応じて土壌改良を行います。なお、地盤を壊せない場合は隔離栽培を行いますが、「いわて型自動点滴灌水システム」等の点滴かん水システムが必要となります。

果樹

支柱立てや結束、粗めの剪定、棚の点検を実施しましょう！

1 事前対策

(1) りんご

- ア 幼木は、支柱を立てて結束をしっかりと行い、普通樹の成木は、大枝に予め支柱を立てます。
- イ 雪害を受けそうな枝は根雪前に粗めの剪定を行い、傷口に枝の保護剤を塗布します。
- ウ 雪に埋まった枝を掘り出すとともに、雪が軽いうちに枝の上の雪おろしを行います。

(2) ぶどう

降雪前にぶどう棚を点検し、粗めの剪定により枝を短くするなどの対策を行います。また、ぶどう棚は、倒壊のおそれがある場合は棚上の雪おろしを行います。



写真1 落葉前の積雪によるりんご樹への着雪



写真2 降雪による側枝の折損
(青森りんごT S導入協議会 HP より)

2 事後対策

(1) りんご

ア 樹が倒伏した場合

積雪の状況を見ながら、できるだけ早く、根を切らないように樹を立て直します。立て直した後は支柱等にしっかりと固定します。

イ 枝が裂開・折損した場合

大きな枝の分岐部が裂開した場合は、ボルトやカスガイで接合し、支柱等に固定します。裂開や折損した部位はできるだけ滑らかに削り、保護剤を塗布します。

ウ 倒伏や大きい枝の著しい折損により回復の見込みが無い場合

栽培に有利な系統（着色系ふじ）や高収益な品種（「紅いわた」、「はるか」）などへの更新（改植）を検討するとともに、りんごでは早期成園化技術（ポット養成フェザー苗）の導入により未収益期間の短縮を図ります。

なお、りんごのわい化栽培の場合、同一樹列内に異なった品種を植えると、品種により摘果、収穫、病虫害防除等の作業が異なる場合があるので、同一品種を植栽することが望ましいですが、周辺樹の樹齢や品種の植栽状況を考慮し、計画的な改植を検討します。

(2) ぶどう

降雪により棚が倒壊した場合には、安全が確保されてから早めに棚の針金の締め直し等を行い、剪定、枝の結束を速やかに行います。枝の倒伏、裂開等についてはりんごに準じます。

1 事前対策

- (1) 積雪により、倒壊の恐れのある建物は可能な限り補強します。
- (2) 大雪被害による停電を想定し、搾乳等作業に支障が生じないように、早期の電力回復を図るため、電力会社や発電機の借用先の連絡先を確認するとともに、近所や団体等とも情報共有をしておきます。
- (3) 降雪が予想される場合、貯水タンク等を利用して必要な水を確保します。

2 事後対策

- (1) 畜舎等から異音等がないか巡視を強化し、異音が聞こえた場合は直ちに避難します。
- (2) 速やかに除雪と雪おろしを行います。屋根の雪おろしは転落や落雪に注意し、また、複数人で行うなど安全性を十分確保します。特に建物内に家畜が居ない場合（建設中、飼料庫、機械庫など）、内部からの家畜の放射熱がないため、屋根の滑雪が起こりにくくなります。また、積雪後、しばらく経ってから倒壊する二次被害もみられるので注意して下さい。
- (3) 停電等により、搾乳が出来なかった時間が 16 時間を超えると乳房炎のリスクが高まります（表）。搾乳再開後は、前搾り乳の凝固物（ブツ）の有無を確認し、クォーターミルカーでの搾り分けを行うとともに、獣医師に早めに治療を依頼します。

表 搾乳中止時間の乳量、乳成分への影響

	影響	回復の状況
16 時間以内	乳量、乳質に問題なし	—
16～35 時間	乳量、乳質はやや低下 乳房炎の危険性	・ 乳量、乳質の回復は概ね 1～2 週間 ・ 乳汁分泌停止の場合、泌乳後期にシフトする事例もまれにあり
35 時間以上	乳量、乳質は大きく低下 乳房炎の増加	・ 乳房炎は、発症あるが早期治療により回復

平成 19 年釧路技術支援会議資料より

1 事前対策

育苗ハウスが倒壊しないよう、「農業施設」の項を参考にして事前にハウスの補強や降雪時の除雪を行うとともに、ハウスの倒壊により育苗開始の遅れや育苗できない可能性もあることを想定し、事後対策を十分検討しておきます。

2 事後対策

大雪により育苗ハウスが倒壊した際は、通常どおりの育苗ができなくなる可能性がありますので、以下の対策を講じます。

(1) ハウス再建によりは種・育苗の遅れが想定される場合

育苗は、品質・収量の確保を図るため、安全出穂期内に収穫可能な種晩限、移植晩限の範囲で行います。は種晩限までにハウスを再建できない場合は、JA等を通じるなどして必要な苗の購入を検討してください。

(2) ハウス再建のめどが立たず、利用可能な育苗施設に限られる場合**ア 育苗箱数の低減のための対策****(ア) 苗の種類の変更**

中苗又は稚苗の適正範囲内では種量を増やすほか、中苗から稚苗に変更することで箱数の低減が可能です。

(イ) は種量増加による箱数の低減

慣行の稚苗移植栽培に比べ、は種量を4～7割増やし、加温出芽後に21日程度育苗して移植する「高密度播種苗移植栽培」、同じく稚苗移植栽培よりは種量を2～4割増やし、加温出芽後に常時被覆で9～12日育苗後に移植する「乳苗移植栽培技術」により、育苗箱数の低減が可能です。

イ 直播栽培（育苗自体が省略できる技術）

代かきしたほ場に鉄粉でコーティングした種子を土壌表面には種する「鉄コーティング湛水直播栽培」、畑地状態の乾粃または催芽粃を土中は種する「乾田直播栽培」などがあります。

ウ 露地プール育苗

育苗ハウスが利用できない際の緊急対策として、加温出芽させた水稻苗を露地プールで育苗する方法があります。

露地プール育苗では、育苗期間の日平均気温を置床日の翌日より積算して340℃程度確保することで、機械移植に適する稚苗相当の苗質を確保することができます。

上記のいずれの事後対策でも留意事項がありますので、詳細については、お近くの農業改良普及センターまでお問い合わせください。

融雪対策

除雪作業や融雪で春の作業を早めましょう！

例年どおりの春作業が進められるよう、除雪や融雪作業を進めます。ハウスが倒壊した際に、跡地にハウスを再建する場合は、早期に作業ができるよう、除雪や融雪資材の散布で融雪を早めます。

1 除雪

除雪機等の利用により、圃場外に排雪します。なお、除雪にあたっては、周辺の圃場や交通等への影響がないよう留意するほか、施設や作業者・通行人の安全に十分配慮してください。

2 融雪資材の散布

融雪資材を散布することで融雪を5～10日早めることができます。なお、表を参考に使用する資材を選ぶとともに、留意点に気を付けて散布してください。

(1) 融雪資材の種類と使用量

資材名	散布量（10aあたり）
畑土（火山灰土等）	40～50kg
炭（粉、微粒）、炭化鶏糞	40～80 ^{1）} kg
もみがらくん炭	10～15kg
てんろ石灰	40～60kg
ようりん、BM ようりん	40～60kg

※塩類集積土壌では、てんろ石灰やようりんの使用は避ける。

(2) 散布時の留意点

ア 散布時期

- ・ 最高気温が0℃を越える日が続き、10cm以上の新雪が降り積もる見込みがなくなる時期になったらなるべく早く散布する。
- ・ 降雪が続いているときは、資材を散布した層が堅雪になる恐れがあることから散布を見合わせる。
- ・ 散布後の積雪が多く散布した資材が見えなくなるような場合は、2回目の散布も検討する。

イ 散布方法

- ・ 雪が深くても堅雪で歩行に支障がなければ背負式動力散布機での散布が可能。
- ・ 全面散布が難しい場合は、吹きだまりや日陰など、融雪が遅れそうなところに処理する。
- ・ 足場が不安定なので、作業に当たっては安全に十分配慮する。

ウ 散布量

過剰に散布しても効果は変わらないので、適量を散布する。

エ 排水対策

融雪水が速やかに排水されるよう排水溝を整備する。

農作物技術情報の本年度定期発行は今号で終了となりますが、気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。